千葉寺町鷲谷津遺跡出土の弥生式土器

白　井　久美子

はじめに

千葉寺町の遺跡が、考古学史にその名を知られるさきがけとなったのは、『弥生式土器集成本編２』（小林・杉原1968）に掲載された「千葉寺町出土」の土器であった。1956年に中野台遺跡から出土した２点の壺が収録され、その特徴によって弥生時代中期前半から後半へ移行する過渡的な要素と東海東部・北関東の系譜を合わせもつ形式として注目された。

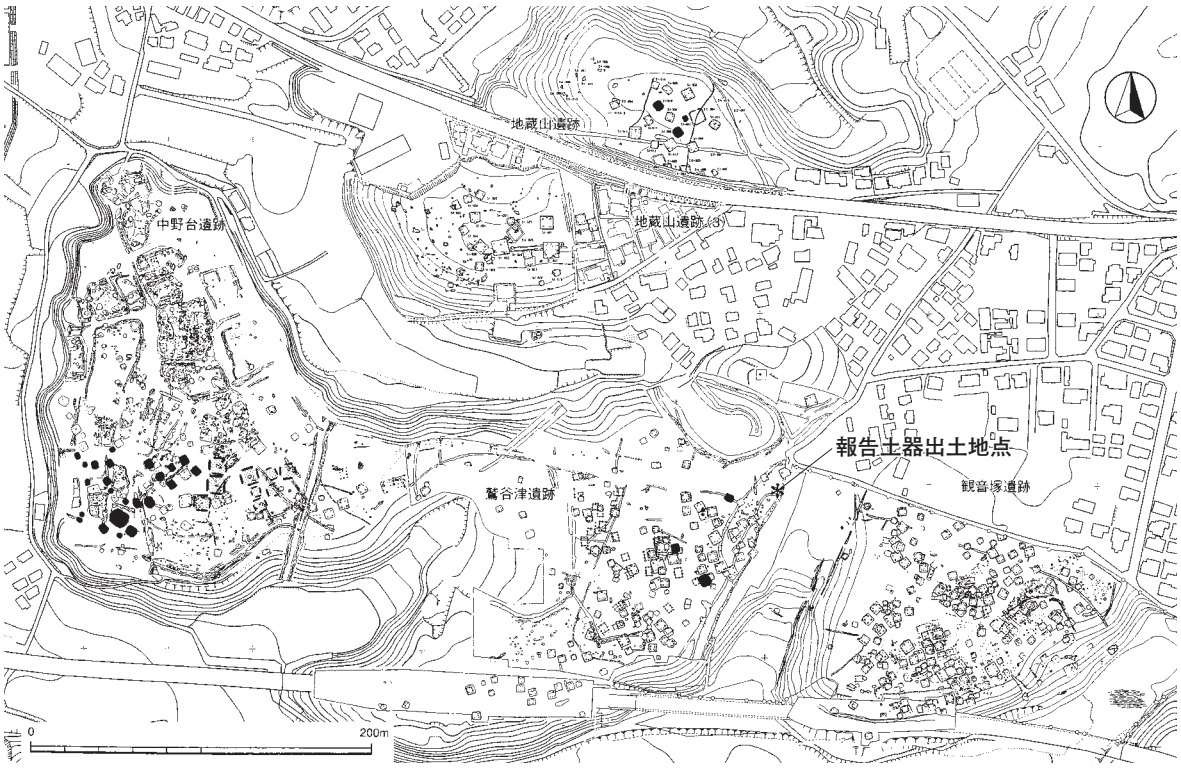
鷲谷津遺跡は、中野台遺跡・観音塚遺跡・地蔵山遺跡とともに、千葉寺地区の区画整理事業に伴って発掘調査された遺跡である。これらの遺跡は、千葉市中心街の南側に広がる台地上に在り、東京湾の旧海岸線から１㎞ほどの台地先端部に立地した遺跡群である。

2006年度に遺跡群の調査報告書が完了した後、未掲載資料を学校教材に利用するための再整理が行われ、接合する弥生式土器の破片が多数あることが判明した。基礎整理の時点で、見逃されていた資料である。本遺跡の弥生時代を語る稀少な資料として本誌に報告し、調査報告書の補遺としたい。

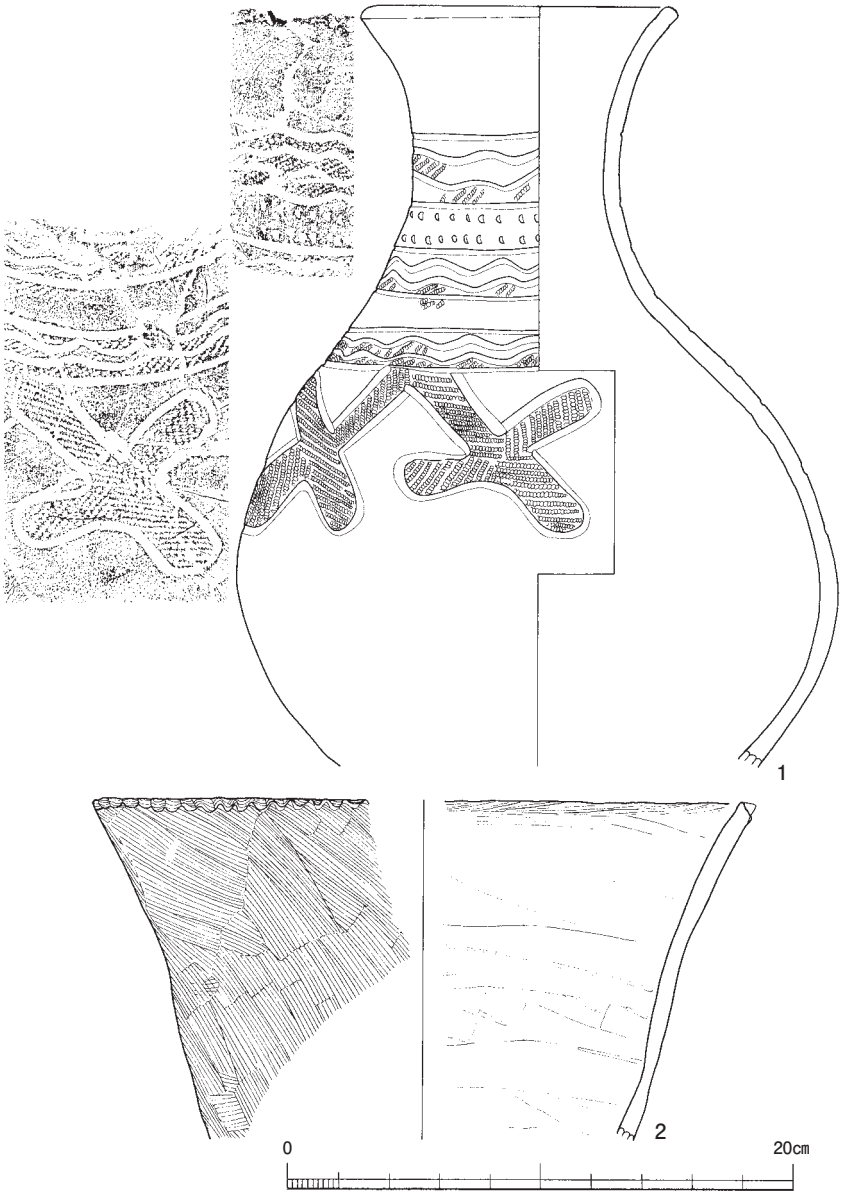
１．遺跡の概観

千葉寺地区の遺跡群は、旧石器時代から中近世にわたる複合遺跡で、中野台遺跡は中近世、鷲谷津・観音塚遺跡は飛鳥時代～平安時代、地蔵山遺跡は古墳時代中期～飛鳥時代を中心とする遺跡である。弥生時代の遺構・遺物は後世の活発な土地利用によって大幅に失われ、本来の姿をとどめていない。

弥生時代中期の遺構は、地蔵山遺跡の北東部に竪穴住居跡が３棟、鷲谷津遺跡の東辺部に竪穴住居跡３棟と土壙２基、中野台遺跡に方形周溝墓が９基残るのみである。方形周溝墓の立地から見ると、鷲谷津遺跡に中期の集落が広がっていた可能性が高い。中野台遺跡



第１図　千葉寺地区遺構全体図（黒ぬり部：弥生時代）



第２図　鷲谷津遺跡出土土器

壺頚部

壺肩部

写真１　壺の文様帯・甕の口縁部

では、方形周溝墓群の西側に弥生時代後期の竪穴住居跡が24棟ないし26棟あり、後期中葉から末葉まで継続して営まれているが、中期に遡る例は１棟もなく、墓域と居住域が明瞭に分かれていたことがうかがえる。なお、観音塚遺跡では、弥生時代の遺構・遺物は検出されていないため、居住域の外であったと思われる。

1956年に中野台遺跡から出土した２点の壺は、再葬墓に関わるものと推定されていたが、1985年の広域調査によって、方形周溝墓（SX001）の溝から出土した可能性が高いことがわかった（白井ほか2006）。

２．本報告の土器について

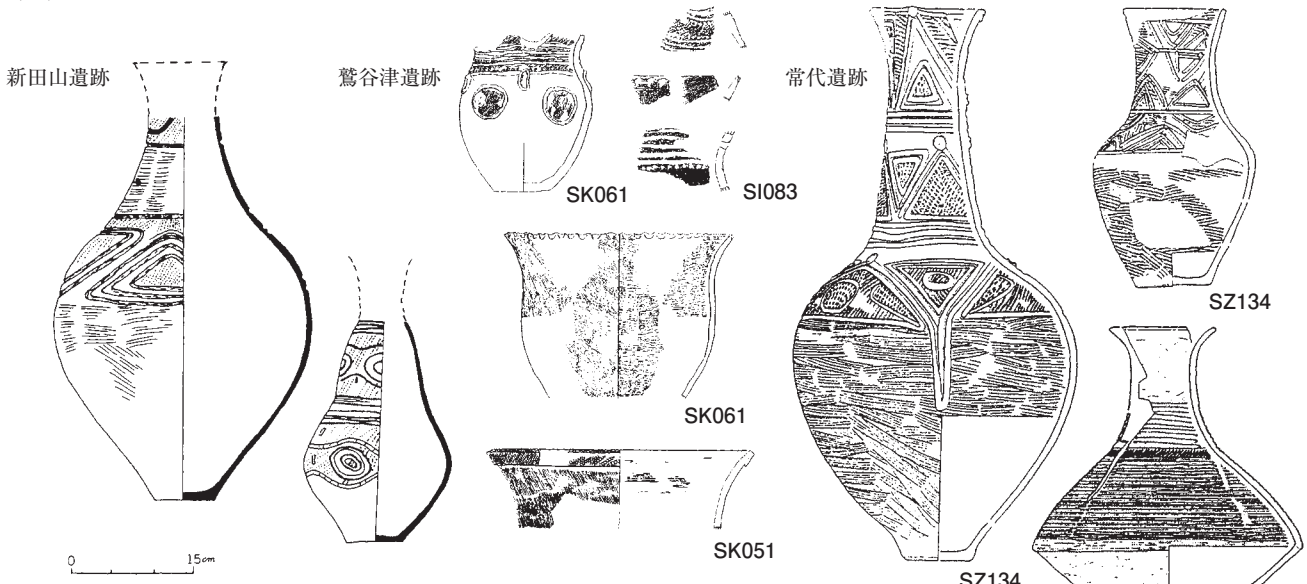
今回報告する資料は、観音塚遺跡の調査時に遺構外の遺物として採り上げられた弥生式土器である。しかし、記録されていた出土地点「観音塚遺跡Ｐ27-02グリッド」は、浅い谷を挟んで西に隣接する鷲谷津遺跡の北東端にあたる。出土地点は、観音塚遺跡の西端から約15mの台地陸橋部で、鷲谷津遺跡の遺構が途切れる境界域である。調査時に観音塚遺跡の遺物として採集されたものと思われる。

（１）　壺（第２図－１）

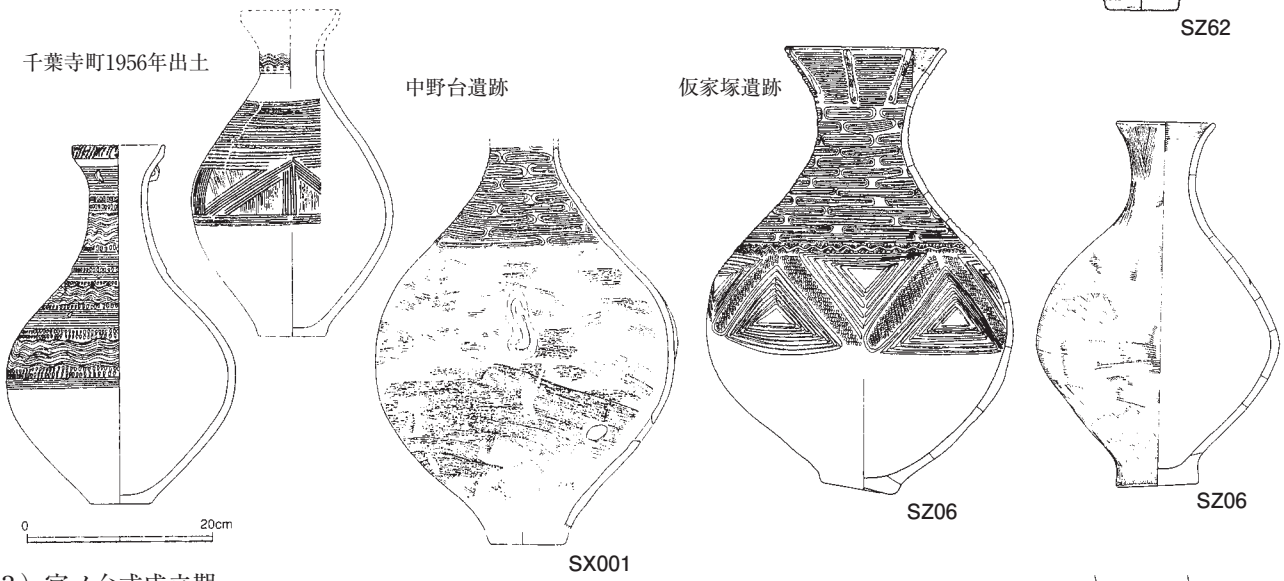
口縁部が緩やかに外反した、なで肩の長頚壺である。頚部がそれほど高く伸びない器形で、最大径は胴部中程のやや下方にある。最大径付近でわずかに屈曲し、弱い稜線が認められる。

口縁部はほぼ全体が遺存しているが、端部は欠損や磨滅が著しく、約1/7周が辛うじて残っている。やや厚手の単口縁で、口縁端部も含めて無文である。外面は、縦方向のヘラナデ調整の後、磨いて仕上げている。頚部は80％～90％、肩部は90％～95％が遺存する。頚

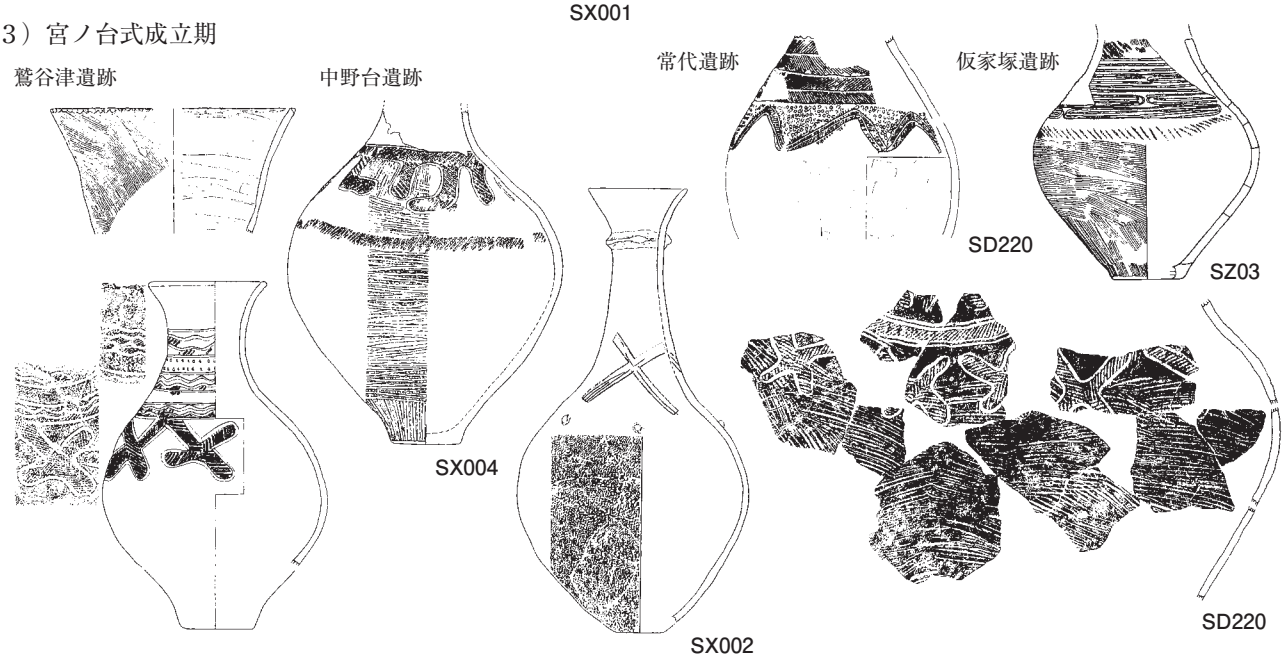
（1）池上・中里式期



（2）池上・中里式期～宮ノ台式期への移行期



（3）宮ノ台式成立期



第3図　弥生時代中期中葉の千葉寺町出土土器

部から肩部にかけて６条の沈線文で区画された４段の文様帯があり、ＬＲの縄文を地文とする。最上段の文様帯は２条の緩やかな波状文、２段目には２条の刺突文、３段目は２条の緩やかな波状文で、縄文を磨り消した無文帯を挟んで４段目も２条の波状文である。波状文は、沈線区画と同様の施文具を使って一条ずつ描かれており、文様の幅は2.5㎜～4.0㎜とやや不均一である。肩部から胴部上半にＸ字状の沈線区画文が垂下する。Ｘ字状の沈線区画は２個一組で４単位が描かれ、区画内にはＬＲの縄文が施されている。胴部下半は無文で、ヘラ状工具の調整の後、磨いて仕上げている。内面は、著しく摩滅し、調整は確認できない。

外面の色調はにぶい黄橙色～橙色で、赤彩痕は見られない。内面も同様の色調である。胎土には砂粒が多く、ウンモ粉末が見える。口径は12.4㎝、頚部径8.2㎝、胴部最大径23.7㎝、現状の器高29.9㎝である。

（２） 甕（第２図－２）

口縁部が直線的に開いた、深鉢形の甕である。口縁部から胴部の35％ほどが残存する。外面の一部は、使用時に付着した煤などによって黒変している。

口縁端部は、ハケ状工具を外側から押捺して波状を成す。外面は右下がりのハケ調整（８本／㎝）、内面は口縁端部に横方向のハケ、以下はヘラ状工具によるナデ調整で、工具の当たりが明瞭に残る。

外面の色調はにぶい黄橙色～黒褐色、内面はにぶい橙色である。胎土には骨針・スコリア・砂粒が少量含まれる。口縁部復元径26.2㎝、現状高13.8㎝である。

３．土器の位置づけ

今回報告した壺は、器形・頚部～肩部の文様帯に中期中葉の中野台遺跡出土土器群と多くの共通点をもつが、肩部の横帯文に無文帯が見られ、磨消縄文を充填した垂下文が肩部から胴部上位に位置するなど、後続の要素も認められる。そこで、既に報告した千葉寺地区出土の弥生時代中期の土器群と比較し、その位置づけを考えてみたい。比較資料として、この時期の東京湾東岸の代表的な資料である、南房総市三芳村仮家塚遺跡と富津市常代遺跡の土器を取りあげた（第３図）。

南関東地方の弥生時代の遺跡は、宮ノ台式期の中期後葉に環濠を伴う本格的な稲作農耕集落が飛躍的に拡大し、充実する。その前段階には、東北の影響を受けた北関東系の文様帯と、中期前葉の相模・平沢式に後続する遠江を含めた東海東部の土器と密接なつながりをもつ土器が用いられた段階がある。それは南関東から埼玉県北部域に稲作農耕社会が定着した時期であり、墓制が伝統的な再葬墓から方形周溝墓へ変換した時期でもある。千葉寺地区の中期中葉の土器群は、この宮ノ台式期に移行する段階を中心としている。以下にその変遷を見ることにする。

（１）池上・中里式期は、埼玉県池上遺跡・神奈川県中里遺跡出土土器を標式とする。千葉市新田山遺跡例や鷲谷津遺跡の竪穴住居（SI083）・土壙（SK051・SK061）から出土した、縄文を地文とする多条沈線文・刺突文，磨消縄文をもつ精製土器とハケ調整の粗製土器によって構成される。中期前葉の特徴を継承した段階であるが、東海西部の貝田町式の影響を受けた斜行条痕や粗いハケ調整が突如現れる。常代遺跡では、SZ134・SZ84出土土器が相当する。

（２）池上・中里式期～宮ノ台式期への移行期は、東海東部～北関東～南東北におよぶ広域の土器系統の影響が見られる段階である。口縁部に東北系の縄文帯をもち、櫛描文（横線文・刺突文・波状文）で飾られた中野台遺跡1956年出土壺、擬似流水文・沈線文・結紐文に重三角形文を加えた仮家塚遺跡SZ06の壺が該当する。ハケ調整のみの壺が伴う点も注目される。

（３）宮ノ台式成立期と考えられる土器群は、櫛描文が退行し、沈線区画の磨消し縄文が主文様を構成する宮ノ台式の特徴をもつ。また、文様帯に無文帯や間隙が多くなり、沈線区画を伴わない縄文帯が出現するのも新しい特徴といえる。中野台SX002の壺にはオオバコの擬縄文があり、擬縄文のカナムグラからオオバコへの変化を宮ノ台式期の指標とする見解もある。これらの諸点を宮ノ台式成立期の要素とみれば、本報告の壺と甕は、この段階に位置づけられよう。

引用・参考文献

１）石川日出志2001「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』第113号　駿台史学会
２）甲斐博幸1996『常代遺跡群』㈶君津郡市文化財センター
３）甲斐博幸1998「君津市常代遺跡の造墓過程」『研究紀要』Ⅷ　㈶君津郡市文化財センター
４）黒沢　浩1997「房総宮ノ台式土器考」－房総における宮ノ台式土器の枠組み－『史館』第29号　史館同人
５）黒沢　浩1998「続・房総宮ノ台式土器考」－房総最古の宮ノ台式土器－『史館』第30号　史館同人
６）小林行雄・杉原荘介編1968『弥生式土器集成本編２』　東京堂出版
７）杉原荘介1943「下総新田山遺跡調査概報」『人類学雑誌』58-2　日本人類学会
８）小川和博・大淵淳志1994『安房仮家塚』　三芳村教育委員会
９）白井久美子ほか2006『千葉市中野台遺跡・荒久遺跡（４）』㈶千葉県教育振興財団